茅蔭句集

竹まと所

一

丈夫俗姓を内藤氏にして世々尾張の国大小
秋城主に長を以て仕ゆ文を右京亮和
漢乃才あり若きより佛乗に帰して玉書
和尚の禅意をつゝへまちを辞して薙髪を
偖白毫屋一処半化僧軒端月自由
や寂寞性遊佛乗を追号法雨入林丘
歳白浦風みきゆるを吾此ゆゑ以ゝ遊小
あつを去りて湖南秋葉津龍ノ岡平第
庵をむすひ佛幻庵と号し芭蕉翁を南
祖とまちうくすてそ此跡あり今号の者とふ

翁死滅後山ゝ義りて法要乃報ゝとゝ
一石一字の法華経を書写して墳ゝ築く
元禄十七年九月廿四日庵にて生
化を悟り能ゝ器乃京林の中ゝ埋ム
寒ゝ少ゝ寺侍

丈草慶白集

春

うゝひきや若草乃ハ穂乃長
外箕戸のあふちゝかつや梅乃花
床掛き梅さくこのゝう育草乃
待ことき梅ゝ咲るも案摺ゝ木
東鶴
梅うゝや湯立の跡乃岩の内

序屋招の梅ちらきりの烟出し

遠色うせる新春を賀す

水仙より化するを落る梅の雪

尾張の国よりを探りて

うぐひす花ちり初ふる疑迫風

芭蕉翁の性質を思ふ

梅の香に まよまよ道ぞ ちやるこのみ

引ふ色てしるしうるる 梅ゝ実

我ゝと 鶯の 近ゝ 根芹哉

きらけを ゝ士用ゝ市を 墨ゝ

夜明すて西受半や ニツかし

精雲ぞを うしゝ人をあつ色ゝ

雲雲乃 陽あり ま や 山の上

意柳や 薮 木をもる 身ぞ新

精 雲も出て うりの世の 桃 花ゝ

春里ゝ 帰りて

精 雲に もりあそせつ千年ゝ

送り火ぞ 山ゝ上るや 家ぞ 新

移 書ぞ ゝれて 高るや 山のうへ

夜舟ゝ上りて 酒を 亨ふ 蛾 伝

いなつまの秋 明て後も舟こゝろ
梅ふる人は此さきれやきりくま
り燈に心やゝ袖の紅りくす
音まてや戸みうれしる鐘撞
踊子乃うへり来ぬ夜や蓑
笠れと元まゝ等きまきしに
まりくま峠や出立北鶯の下
物うて森もや裾の支りくを
森くる北 方まもむや蛙蜂
つれのおふ江へ掃そ紅りくに

まひうちんて金器なき北
まうけまきのちのさあやれすくろ
旨戸中まるさえのてりる田鶴の
里北男の田螺のうを水蔵
沼めまちあれハ腹をなるる
然乃いくともなく入こりて
入暮る 鶏も死ぬる田まくのう
取つゝあ ふてうる鮭可鶏
梅や音を遊ひて
杉花をうちくこて中蛙う男

中菴

火をたてて新酒の味あたゝめ
の〳〵猫やうゝ孔行をと杉形牛
帰る空ちかくてや夜おのやうの所
笠卯月雲雀なくく煙れ
鈴ゝよ同しひとうの花杉の空

夏秋風の空や雲雀の養おれ
遊の庭をみ窓てや雲ゝまとう
芦文よ別ゝとう空

家付孔〳〵孔ぬやうまや風中
大原戸蝶の出てまふ孔 月
陽光よ 清孔家さへまとう
芭蕉翁乃墳ゝまふて我病身
をおもふ
かゝるふやゝ 蔓ゝ和ゝ仮ゝ
寄而や 何ゝうゝん 暮咲戻り
ゝるゝ光やめけ出ゝや孔悪意の花
庵を仏孔ゝよゝるめ山ゝ 合し
さゝ物ゝ世ゝ ゝ 一ツ孔孔の ゝ

てるゆへ
なるらん
自由ちり
ちるもの
一ぱいのの
生垂
歌れ
亭
俺て
後
未
の
伊

閑居

夕に
白
生
角入れ
夏に
破
うくと
書
花
田

死さとも第さとも走れ去庵の花
雲格の庵ゑ立ち家ゑ忍ら乳
花ちるや歌あれとる岩比丘
水壺よくつるや花乃人出入
片風も異ゑうきもり花むし分
ちゆうさとも老賣ゑしてれけ澳の家
木琢や拾本きさゑも花比牛
笠拾年舞もちりの花の友
ゆ乗乃失雄めけてや家君下
海赤の花

蕎くむや花乃比牛乃ゑやり集

病中

山ゑうも花人りとりや秋も少
夕ゑへや家の波ゑもあつゑ

餞別

天遠り比先ゑ立りつくし
笑ゑうゑ柴のあやゑ鄰宿山
さし祝く家へつゑ比日立ゑ雷
あゑうゑく岩ゑ下や薩の花

畫賛

何北斎の彩色孫ちむく雄子の
こゝ自や多孔北斎色北素一本
こゝ自后
吟如何き星多行しも夢の持

夏

時多帰や淑也乃さ淀り
庵ゑ之や〻〻静北なとゝきを
ゑ親瀧う上のゑゝ

川越乃淀中ゑを　郭ゑ
か少〻き去誰よやさん川むゑ
時如百よ京つゝ以北時多
葉経ゑ禁や北風のゑ親
杜鵑すくや接も掃さめゝ
ゑるへゝゑ山誘もゑよ杜宇
山道や童ゑ京ゑひゝく時鳥
咲咲ゑて
蕉庵の庭入るや蕉乃杜鵑
本曾川北かゝるて

ちるの木や篝火の上に水の音

月夜のけいこ

船丸のけいこに中にかくれきた

遊行寺

筆に能を時出せ鄭子

寒て行や梅田拙把書蜀葵

蜀の梅乃麦や稲より出て夕ら影

移りよやり上りしかも田の丸

谷風や書田を廻る庵の家

移風を中より青田の戦きの

夕ちへや茂るよりまる川に跡

寺来ろ為柿舎まて

芽出しまるこ葉より成る柿の実

ちり絢瓶蛇のり来や杜鵑

書こやりやもむる音の蔭

鳥鐘や寄仏そよく山つゝひ

多よつれて行る書をせを多に仏

草芽を出かゝ水に的言れ

ちしまるむ蛍の中や谷の水

螢火や鹿に寄せ遠ひ

豊後龍門寺にて

笹尖や村雨を取る龍にして

曲がれる子を悼

[illegible]を龍にてかなしかりけり

やうしを出る時はうの人こゝろ

仰木の里書懐

れにの言乃花やかに鈴の篠にて園

血をかしまとれとなる数のみ庵

[illegible]日さゝを多にて のちやはにて 遠し

裏病傷人

りもよのうれ入りは恢にてこゝ

魯丸制製せし時金鮮

恢帳を出て又陣ふ友にて月

陣の中や蚤の出てゆく耳の穴

電にさゝひ出してや失り出

梅かさす陽るゝ字

蛭蛸やかれて上彩の山

久立にうらへる梅雨の家

義僕の関する

町中の山や五月乃上り雲

白雨はしるを下はや井北鐵
夕立や蛙のこゑ自也 松のこ
涼しさに稚子とや岩のなぶり
小屋風や山里すゝし 服部土
あつ雁や水て家を蛙く夕まぐ
つゝ立や忙みる袖や 涼ふる
家秋乃根ぬけや 湯の豆まみ
まゝしさ北山もとしつゝ
丈山乃像
さゝ揚に蕣を寫して形まゝし

大山にて市中苦藝
涼しさを見せてやうゝく 佛北松
ぬ市案一 孤涼北市や 孫の月
曲樹庵乃孤涼
寺水よのこ涼まゝや梅北中
涼笠に夏合也まり 蓮の蕣
蟬角北 頭色しる角ふ 蓮元
 雁北行勝北送りて
まゝ水 月 祇つくゝり 笠
雨もの雨 家もとるゝ 蕃北

之表情分やうなる
世界中を枝もしなふ国蔭の雷

橘行

帷子あるくやうまりの日北出る孔
梅雨をさして出るとて
雨乞ふ先立ふや玉姫孔笠

秋

秋夕遠秋の色や京の魔

病床

玉北亭の中より咲出る寒菊
啄木乃入おもちゐ色蕎北松
文七伝義よ文通北奥に
中山けとも少い女立七体原
山之内北やうつまり鳥北之
ぬけうに中ひて北る秋乃鶯

旅中

塔婆北寄そを縋る笠の中
帰之北ゆく目さしまとし庵北形

小嶋峠や所をうちこせば庵の春
なかれこまを思ふる花咲うる
男鹿の島や雁出るる庵乃舟
名月や海あるまり あふ秋光
名月や世 車きしらず辻堂
辻堂の菊さそこも 月夜の
戸を明て月はるしや芝居上
るる 樽を 漏よあてゝ月の雨
野山まつうて豆うる身乃あ
京 菜 蕎 麦 も 月 に 伽 仲 間

淺川の遊ふて

舟引れ道ふるけ雪月乃孔
麦白してゆるる林を無しいるる丸累の舟
そしをんて言出るる白れよし
友ふれの舟よ春 月ぬ 歌寄少
答見せる山菴
焼栗も宿ゆく夜 ふるの孫
病人と結ふ木よ春る 歌寄ふ
海乃浪ふ宅より 二人 降る
蛍も出る北 芋をこうふる

鶏頭に蔦とからみ笠の縄
鶏冠乃高をうつすや ぬり机
ら柿や障子にうるふ夕日影
木つゝみ定盤出来熟柿小

唐柿食ふ人うらやましく

渋柿をかゝれ うゝ性よ的瓦斯
谷こしよ鳴るの孫や京北中
居風呂の下や東山乃方の孫
佛のけし庵北 鳴や糸杉業
鳴鳴まて

竹伐乃和 まを見へを薬の肉
芦の穂や新 掃上家蓋うゝ
あし北穂中 蓋をやゝとて打もゝ
早咲の梅を 梅北和葉の
稲穂より出 ある中秋の雨
松の葉北地 立ち蚊北雨
祢ちちき京 をゝ京や
伊賀へゝを あまの雲
いゝ北ゝを 村ゝ紀浦ゝて
猫猿も秋 ゝを 秋北雲
山北へ

板屋を見るにつけぬる秋の比
寺院やをさしもあらぬ海士の
住り来る魚のまきのや所れ第
重所の新菅まこもの葉うれ
紅葉秋もさきをりて孤山
須磨乃浦

海あまの秋のあてとや寺と船
り秋や 捨よう海龍 屑
行秋乃四方より 落る屑の雨

雪蔵し松をうれ地乃初しれ
一方を義孤をつふ村雨う雨
馬をう沖の村雨の行変
笠人うし氣うけぬく影田孤格
鳥の羽もさをを乃しれ口
雨根菅の海を踏りむく村雨れ
鍋をしかさくり影や村しれ
孤雪や村雨をる比寺れをて

赤松ゆるり孔雀を伴して
ねたるてみや樹雨孔うう看物

越中箱根際の面

八月や対面うう雲孔庵光
海山孔しられつきあふ庵の上

所思

ものれうう　拉も孤子孤しられ

芭蕉翁高中祈徒の句

峠こを時のきゆひやもろきやひ
ものれ翁の高庵より借りて

うつくしや葉の下孔　雲さ可熟
傳七師孔孤栗

曉の蕎も　ゆるくやあ多蟲蕎

芭蕉翁追悼

ゆりもものふい　雲孔徐也墳の前
色蕉翁のちるくもうう仲
義さ多雲ょ偶居ミてんぜさ
ものれすもまう許ゝ中遠る

敷雪や葉　湯の後乃ミもり鍋
ぶしくの蕎　所も同し蕉義の句

志めるこゝ地蔵菩薩像を彫りあらはす
湖上乃木曾書きそ孤すくき
島伐ねるゝくしのぬうつきよる
油の洞も一しほ地蔵菩薩
むかし齋寺乃夕アラ観音を
梵逸吟席のつとゑねもとろ
彩ゝも世紀納きひとり鉄ゝ有る
分ちれハなそく孤を向ゝ心ゝ
ゑもそあるゝ近き谷川乃小石
うきあつゑ蓮経の奉品を浮

そ地菩提を引りその老坂
謝ゝ人ゝを頼ゝて誘ゝ人ゝ
ゑゝのゝ聲くゝ心裏のゝまりに
筆を投ゝちゝ飛ゝて巻ゝ
墓前の拾世をゝ原のゝ
石碑地墓を保ゝり和しゝ孔
芭蕉翁七回忌追福地蔵法華
経写経の前書あり
移ゝ年ゝ経ゝのゝ風の歳葉小
水底の岩ゝ高つゝ未孔苗孔

風乃あらし雪やこな掃

赤石孤山掃塵翁乃

こうしの名を佛高と必ずなる

句を夢えてそ孤翁の像を出て

賛をうす

木ぐし孤身を牧うろし嶺の牛

老こうへ岩のあゝれや窓のうち

山中酒

雪ぬる宿孤志やり手箱孤翁

ちつ霜の泥よりそれつ家の色

里そを孤雪見や比叡の前しろ

雪乃序隅さびし牛孤翁を

孤孤そろふちり雪のうれ

酒を寄せや岩孤雪れて

ぬりえて山こうえさし雪の窓

孤すく家孤屋間や雪暮り

地も山も雪よりそれて白もち

さうすくや ぬりつも峰の雪孤雪

おれあふて中行色や雪の友

都の人ふかき心ある
山ゑにあまりをやまて京の雲
嶋嶋の地明石にて
紫の戸やゝ我を雲にあ
ちこちの菴を訪ひ事ふかく
別るとて
食の上を帰鳥うれ
村雨乃岩もるやゝ吹の根
ちまにまるる雲の黒ゝや雲に向
林しさの底ぬけて降みぞれ雨
皆戸に入ぬ上京の鳥ゝ
さるる夕庚申待乃舟形
ぬ底をうて来る新の小鵜小
鵜をうすをそしをうの鵜のむれ
雲後に春覚しや鶴に春
猶の火や暁ゝ乃五六尺
家庵の火燈の下や古狸
下京をとりて火燈行脚うち
かくと鳥日さしの火燈の陰

守り居る中焼を菴の中宮の面
映象おもしろ山や谷を山や杉ふ
り暁の雨霧色ちりをとゝろを通して
山やお赤多少他の中北賀や焼
岩の麓や傳の人り焚よ行
残多者てよれを火焼のそゝり炭
貧交
まし公を残子の切を後りり
一夜さよ猫り多ものやけそうれ
屋森さへうらぬ歩ものれと

立別る指北跡ものこそと思ひて
踏や始る歩歩の定や置土麓
鶏北臣見つゝや多こゝり
三つゝさを為珠も思を猶代也
毎晨よ為形ものや鉢ものま
一身を切よ朱の世ゝ為よ地
ゝ門乃仏にひゝくや鈴敲
七嶋多七湊鳥撰集の句
白撰や多ゝ化降夜の寒ま涵
水風吾よ篤ゝ多ゝ谷の巣

鷺北員の拙聖る居所あるこの歌
神移乃さえこも彩也神宮の夏
黒波苔を置海苔とも不岩
間ゑ降つ白鷺日の照き
花と咲物とそ散りとそ浜化
ゆ恵れしよりつの
海苔の名や笠うち尽すそ置鷺
ゆ搗れうけ出き新や神の月
置うも言しも白鷺の名北月
獨浦苔を中し北を色しそ

追加
書物や廣ひ求める糸されを
十五夜の月北ひ中和前ろ
日新ゆ嶺すきちの月の美
牛妻て伯天を捨れ北

追加

うゑもりにうゑたる菴の風ふきまき
著てゐたる猿の食もあるらしと足
影法師の横ふるうる火燒小
者ゝ蹴の茶碗をもてる和尚影
面壁坐禪する地獄の苦
る規矩ふるる峯の子松茸
ゝ川北ゝ中ゝ花の中
船形の笠ゆゝる蔭ゝ小
月代やゝ丸の中北ゝ虫の影

寒津郡の山に京のおもかげ
荊口居るかふ
名月北前へ出るや橋をゝ
賀助能于山房撰集
月花やうきゝうゝ遠る里の山

煙掃て山風うけて吹通し
寒き晩堂北口ゝ鳴て風葉
鉢ゝに悠然ゝ
十五夜のゝこむ年北堂
行燈を消せと嵐乃吹き忘
近き山へ帰るゝ鹿のゝ

安永三午年六月　翠樹堂

蓬門俳諧書林

井筒屋庄兵衛

播屋次兵衛

板行